

# tab

No.  
2  
2007/01/15

木村和史  
後藤美和子  
高野五韻  
石川和広  
倉田良成  
野村龍

櫛 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 後藤美和子：解る／01.  
石川和広：抱擁の場所／03.  
高野五韻：交差点まで／05.  
野村龍：庭園で・夢／07.  
倉田良成：夏のすすしぐらがり／09.

文

- 木村和史：ビッグイシュー／11.  
高野五韻：自ずから然るとらうじと／14.  
倉田良成：言葉の自由びつらじ／16.

あとがき集／18.

装画：和田彰



Canzone di  
Ringrazio-  
mento

画 / 和田彰

2006

後藤美和子

## 孵る

たくさんの拍手に  
けどられないようにしなくてはいけない  
沈潜する水の下の水に  
歯を合わせて寄り添った  
手も足も出なかった卵たち

ある日、黄色い螺旋階段が  
ジグザグの空に巣をかけて  
大きな鶴のくちばし

### 落下傘

燃えるような万国博が開かれた  
エジプトの秘宝のように  
横歩きする大人たちの間で  
私たちの心の  
乳白色の無数の目は  
棺もなく土をかけられる

季節は春だった

陽光は暖かった

新しい道の自転車に

足の下、十数メートルの畦に  
凍った血管となって彼らがいた

ホースで水かける日没

後から乾いていくコンクリート

たどり着く一滴の

呼びかけ

耳をさする空からの水

「皆既蝕」三回序

石川和広

## 抱擁の場所

03~04

寒いから

存在している

という感じ

ええかつこしいだ

たよらない笑いの中に不安を

誤魔化しながら

誤魔化しきれない異物

おれという魔法

時々呪う

生きておれ

生きて折れ

完璧に見える薄氷

生の、生の、生の

にぎやかな、ふところの甘い

甘い

おれ、おれ

ひとつの屈折点

すいません、気軽な符牒

生きることの盲目にさらされよ

さらされよ

いつまでもあやまちを

許せないわけではない

ただし

柔軟ではないおれ

ねころがる

真剣ななにものか置き去りにしたまま

つめたい風

もつと、もつと

吹いてくれ

真剣ななにものか迎え入れるふところができるまで

## 交差点まで

近所の本屋で立ち読みしていて

おかしなことに気がついた

西暦二千百九十九年の地球の危機の物語が

過去形で書かれている

過去とは昔のことではないらしい

では過去形で語られるというのはどういうことなのか

過去を見晴るかす今とは どのなか

本を棚に戻して 僕は考える

思い出してみれば

生まれてこのかたずっと今だった

気がついたら昨日にいたとか、二十年後にいたとか

そういうSFめいたことは一度もなくて・・・

いつもべったりと今だった

並木のある通りに出て 僕はさらに考える

ここというのもそういう奴だ

いつもぼくは、ここにいた

どんなに遠くに出かけても

ぼくがいるのは、ここだった

ぼくがあそこにいる、ということとは

やっばり一度もなかったからね

カレンダーには書かれていない 日

売られている地図には決して書かれていない 場所

僕だけの今、ここ

子どもの頃からずっと

彼らと一緒に歩いて来たのだ

少なくとも今日までは

そよく梢の向こうの空の近さなんかについて

話したりだまつたりして僕は歩いていく

やがてたどりつく例の交差点まで

物語に帰る あの交差点まで

野村龍

## 庭園で

洋梨の夜が ゆっくりと動きはじめた

俯いた門は光を閉じる

濡れた右手が萎えて 手紙が書けない

安定剤を一錠 瞳に垂らす

たちまち風になる

水のうえを

風が歩いて来る

甘い 暖かな雨が降りはじめ

門の睡りは

次第に深くなる

## 夢

猫の瞳の底で

夢は眠っている

誰にも気付かれず

ちいさく緑色の息をしている

寝息は 時折やわらかなつむじ風となって

幽かな眩きをこぼしながら

若い林檎のなかへ立ちのぼる

御使いなら

忘れられた瀧の近くを漂っていますよ

蜜達の金の歌が

折りたたまれた地図からとめどなく溢れ

指の光は丁寧に夢をたどる

若葉につつまれた和音の雛をかすめて

夕暮れはひとけのない寺院を訪れる

## 夏のすずしいくらがり

——堀川正美に捧ぐ3

玻璃に似たセミの影が降りしきる

髪ふり乱したグランドピアノのひびきの破片にみちて

夏のすずしいくらがりの

迷走するおびただしい三連符のかがやきのように、スコールみたいに

大樹冠という鬱蒼たる伽藍のないふで行じられる

華厳にしずむ誦經の渦の中心をなす涅槃ネッパン

野に風が吹くまでの夏安居けあんこの門外で

はかないくだものようにうるわしい八月が匂いたつ

クイナが叩いていった清浄な夜のとびらをおしあけて、朝

山河という庭を掃く

われわれは

森に隠れた彫金師の徒弟

ゆがんだ夜明けの蒼穹を騒々しく打ちつけてなめらかにする鋭利な賤民

または八本の脚で伝承と伝承を注意深くつないで、編んで

夏のすずしいくらがりのなかぞらに

にじいろの仕掛け網だけでこさえたサーカス小屋を出現させる

高貴なドレスに身をつつんだ蜘蛛という名の跳躍する奇蹟に魅入られている

ふるまいしるきササガニの昼下り

まがまがしいほど高光る雲の峰

おろかしくて胸が苦しいくらい愉しかった若いころはなんでこう

金銀モールのうらおもてみたいにいまに到ってせわしなく輪廻してくる？

丸太ん棒よりも未練なく倒れ

それは次の棒からその先の棒にさわって倒れ

やがて世界中のぜんぶの棒が倒れつくすまで水しぶきの悲鳴がやまない

永劫という浮動する海に閉まれたもうひとつの水の場所で

片肺のない男が

むかしのタバコに火をつけ

空を見上げる

もうひとりの

ない肺の方の男は、わが帰る路いくすじの

春ならぬ夏草をたどり

つわものの鎖帷子を少しひからせて

アシナガバチや

蜚蝶の舞うハツカの花咲く路を帰る

夏のすずしい、入日きらめくくらがりのはて

横笛のように望遠鏡を措けば

そこもまた海？

少しひかる

## ビッググイシュー

ここ数年、月に一度か二度、あるいはもつと頻繁なときもあったが、御茶ノ水にある医科歯科大の口腔外科に通っている。電車賃が往復で1240円、治療費が160円なんていう日もしばしばあって、連れ合いに養われている身のわたしとしては、ずいぶん贅沢過ぎる患者をやっているよなあ、とついつい自らを振り返ってしまふのだが、同時に、こんな治療費でこの病院はやっていけるのだろうかとなんだか心配になっってしまうこともある。

二十才のときに「東京を視察してくるぞ」と、札幌のアパートに荷物を置いたまま上京して、そのままいたら30年以上も東京を視察し続けているわけだけれども、御茶ノ水はほとんど利用したことのない駅のひとつだった。上京当初は都内に住んでいたが、その期間はわずか二年ほどで、その後はずっと立川から青梅線に乗り換え、たあたりを縄張りとして生きてきたので、都心に出て行く機会そのものが滅多にならぬ。たまに用事があったり新宿駅に降りたりすると、40歳を過ぎたばかりで死んでしまった、夜行列車と一緒に乗って上京した親友のことなどが思い出されて、懐かしさに佇んでしまいたくなることもある。駅前の混雑のなかを人々と正面衝突することを避けて歩いているうちに、その懐かしさもすくなくどこかに消えてしまふのだけれども。

御茶ノ水駅は、都心での短かい青春時代にまったく無縁のところだったので、懐かしさなどは蘇らず、新鮮な好奇心をかきたてられる現象も、この年齢になつては心に生起することもないのだった。しかし、さすがに何年も通っていると、昨年暮れに

は十日ほど入院をしたこともあって、駅周辺の限られた風景に対してではあるが、少しずつ馴染みが積み重ねられてきているような気がする。

青梅線から中央線に乗り換え、合計一時間ほど電車で揺られて、御茶ノ水駅で降りる。かなり時間の余裕をもって出てくるので、喫茶店に入ってスポーツ新聞を読んだり、紀伊国屋で主に建築関係の本を立ち読みしたり、たまには文房具を買ったりしながら、駅周辺をぶらぶらする。

そもそもの最初が、腫瘍ではないかと疑われて大病院まで回されたという事情があるもので、そんなふうには散策しながら心の準備を整えようとする習性ができたのかも知れない。「悪性ではないと思いますが、いずれにしろ喉の方まで切除することになると思います」と説明された頃のわたしは、知り合いのお婆ちゃんに言わせると、「元気がなかった」のだそうだ。それほど落ち込んだりしてはいないと自分では思っていたが、先が見えないことに対して、知らず知らず気分が凝り固まっていたのかも知れない。

予約時間の三十分ほど前になつたら駅前へ戻り、御茶ノ水橋を渡ってすぐ目の前に聳えている大病院の古い建物へ向かう。この橋の名前を、わたしはつい最近になって初めて知った。それまではわたしにとつて、ただの通路に過ぎなかつたことになる。

橋の上で、ホームレスの男性がビッググイシューを売っている。わたしが通院する日はほとんどいつもその人を見かけるから、ほとんど毎日そうして立っているのではないだろうか。男性は、わたしが御茶ノ水に

通うようになって二代目で、(初代の人の顔を今ちょっと思い出そうとしてみたのだが、思い出せない。初代の人の方がわたしにとって長い付き合いだったはずなのに。)ビッグイシューの新しい号がその手に握られているときは、200円を出して買うことにしている。ホームレス支援の雑誌だからという単純な動機で買うのだけれども、なにかしら興味を惹かれる記事が特集されていることも多い。「ビッグイシューです、ビッグイシューです」と連呼するだけでなく、記事の内容についても触れてくれれば、買ってみようかなと思う人が増えるのではないだろうか、とおせっかいな気持ちを抱いて通り過ぎるときもある。

ホームレスという言葉がどのような人たちのことを指して言われているのか詳しく知らないし、調べてみたこともないのだが、ほとんど毎日、おそらく朝から夕方まで立ちっぱなしで声を囁らしているその人は、間違いなく勤労者の一人と言えるだろう。

それだけ働いて、はたして年収はどれくらいになっているのか。わたしの場合、延べ日数にして二ヶ月ほど、年収にして20万から40万ほどしか働いていないのだが、その人は確実にわたしよりたくさん働いている。しかし、わたしより多く稼いでいるかどうか。日雇い仕事がない日にビッグイシューを売りに立つ人もいるようだし、わたしより年収が少ないということはありえないだろうが、時給に換算したらたいした額にはならないだろう。

同じ時間の労働に対して報酬にわざと変化をつけるのが資本主義社会の原則であって、そのことを無きがごときものとして民主主義社会を成立させようとするのが、資本主義社会のもうひとつの原則になっているらしいので、貧しい(そうな)人を見かけても裕福(そう)な人を見かけても、それらを世界の自然な風景として違和感なく

受け入れる習性がわたしたちにはあるようだ。友人同士のあいだに目立った貧富の差があると、どんなに無視しようとしても、お互いの気持ちに不自由なものが生じてしまうと思うのだが、これが他人となると妙に陽気で、寛容になれるのが不思議と言えば不思議だ。

年収40万のわたしの生き方は自己責任だが、ホームレスの人たちの生き方を自己責任と片付けていいものかどうか。片付けられない問題だと考えられているから支援があるのだろうか、わたしも200円を払うわけだが、支援することにもしも根拠があるとしたら、このことは本当なら早急に解決されていなければいけない種類の問題なのだと思う。

わたしの問題はもちろん放置されていて構わない。わたしの自己責任に200円払ってくれる人がいるとしたら、おかしなことになる。もしそんなことになったら、わたしは慌てて働きに出ようとするだろう。年収が40万ほどしかないわたしに、連れ合いが毎月200円以上支援してくれているわけだが、多分(訊いたことがないので何とも言えないけれども)、それは支援とは違うような気がする。どう違っているのか、わたしとしては複雑な分析をしてみたところだが、「ぜんぜん複雑じゃないよ、分析になど値しないよ」と世間にあっさり片付けられるような気がするので、やめておいた方がいいかも知れない。

分析する代わりにというわけでもないが、連れ合いに向かって、「養ってくれているのは有難いけど、餌さえ与えてればいいってもんでもないんだよ」などと、衣食足りて、とんでもない贅沢を言ったりすることがある。これは自己責任のわたしのおおいなる贅沢で、多少は権利でもあると思うのだが、わたしの場合とは違う意味でホームレスの人たちも、「支援してくれればい

「いってもんじゃないんだよ」と、心の底では思っているのではないだろうか。支援してくれる人たちに対してだけじゃなく、自分自身も含めた、誰と名指すことのできない相手に向かつてそのような気持ちを抱き続けなければならぬとしたら、そんな社会はどこかおかしいのだし、だからこそ、支援する人もされる人もとりあえず堂々と生きていていいのだと言うこともできる。

ところで、ビッグイシューの話だが、61号で特集されている「美しく闘う―抑圧と偏見をほどく女たち」で、アイヌの若い女性、酒井美直さんのインタビュー記事が載っている。

「酒井さんは北海道帯広市で生まれた。父はアイヌ民族で、母は和人。」「酒井さんがアイヌであることを意識の核に据えたのは高校一年のとき。エテケ・カンバの会で、カナダ西端のクイーンシャーロット諸島を訪れ、先住民族と交流したときのことだ。

『：彼らの姿はまぶしく見えました。自分がアイヌであることはポジティブに捉えられるものなんだと意識したんです。』「現在、酒井さんは、アイヌ舞踊を踊ったり、樺太アイヌの弦楽器『トンコリ』の演奏家であるミュージシャン、オキと歌ったりしている。今年の夏には、20代の若者を中心に『ANNU REBELS（反逆）』というグループをつくった。伝統文化も学びながら今を生きるアイヌの新しい文化を表現し、若い層にもアイヌ文化を広めていきたいという。」「ただ、東京では、酒井さんにとってアイヌであることはアピールポイントになっっているが、北海道では今でも居心地の悪さを感じる。『北海道に向かう飛行機に乗ると気が重くなるんですよ。街中で視線を感じると、あーアイヌだから私のこと見てるのかなと思ってしまう』」

東京の人込みのなかでも、アイヌらしき人を見かけると、わたしはしばしば目をと

めてしまう。アイヌだから見てるんだな、という、まさにそのことをしているのである。北海道に帰省していたときに、帯広の街ではつきりアイヌと分かる女性のふたり連れとすれ違ったことがある。わたしは彼女らを見つめ、彼女らもわたしの視線に気づいて目を合わせた。顔は穏やかだったが、あーアイヌだからわたしのことを見てるんだなあ、と彼女らは思ったに違いない。たしかに、アイヌだから、わたしは彼女らを見詰めたのである。

わたしは北海道の生まれで、アパートに荷物を置いて上京するまでは北海道がわたしの世界のほとんどすべてだった。アイヌの人たちを日にする機会は滅多になかったが、それは町外れの山や川で遊ぶ狭い世界で、少年のわたしが生きていたからだろう。母が嫁に来たころには、わたしの町にもアイヌの人の家があったそうだし、隣町の阿寒は今もアイヌの人たちがたくさん住んでいる。少年のわたしにその歴史と意味が理解できていたはずはないが、それでもアイヌと呼ばれる人たちが存在することは常に意識されていた。北海道の人間にとってアイヌはアイヌで、どこか外国からやってきた旅の人のような存在ではないのである。

「二百年にわたる和人の圧迫と非道に抗して、同族間の対立抗争を統一して立ち上がった英雄的なシャクシャインとその戦士たちも、松前藩の鉄砲の威力の前にもろくも敗れなければならなかった。アイヌに鉄砲を与えることを恐れ、これを厳しく監視した松前藩の勝利であった。なお、この蜂起で、鷹打の越後庄太夫、庄内作左衛門、尾張市作衛門、最上助之進の四名がシャクシャイン軍に参加して処刑されている。松前藩がとりわけ彼らの一人（越後の庄太夫）をピボクで残酷な火刑に処したのは、みせしめのためだったのだろうか。」（アイヌ民族抵抗史・新谷行）

## 白ずから然るといふこと

二年ぶりくらいに部屋の大掃除をした。どこに何があるかではなくて、どこに何が生えているかわからないというような状態になりつつあったので、家人からの苦情に屈し、さすがに片づけざるを得なくなった。

机はすでに机の用をなさない。というか、どこに机があるのか判りにくいようなありさまであった。机の上に物がうずたかくフルヘツヘンドしているのと同じくらいに、床からも諸物が伸び上がっているからである。床に積まれるのは、始めのうちは雑誌や本である。こういう物体は平面性に秀でているので、床の上に放り出しても、それなりに確かな収まりかたをしようとする。この時点ではあまり乱雑な感じはしない。だが気づくと——これは本場にいつの間にかとしか言いようがないのだが——なんだかよくわからない塊が部屋を覆っているということになっていたのである。

始めは平らに積まれていた物が、次第に文具や楽器、種々の包み紙や菓子の子の残りのようなものを挟み込むようになり、当然その建築の安定性は損なわれてだんだんと傾いていく。その一方で別の所では小さいものの上に大きなものが載せられ、これもまた危なっかしいことになっている。こういったもの同士が、相互に支えあう場合もあるが、これは幸運な偶然が働いた場合に限られ、将棋倒しという道を辿ることもまた多いのである。

こうなると、部屋の主としてはもうどうかしようと言う意志を失ってしまう。それらの塊を除去する、または直立させるといふことが要求する時間と労力を想像するだけで、胸は塞がってしまう。なにも今しな

くてもいいではないか、と思うのだが、そう思ったときには、また堆積が始まっているのであった。残骸の上に新たに物が積もりだし、いつしか複雑な地層が形成されることになるのである。

こういうことであるから、僕は片づけられない人間として、家でも職場でも常に批判されてきた。しかし断じて言うが、僕は散らかそう、汚くしようという意志をもつて部屋を汚してきたことは、これまで一度だってなかったのである。その時その時のやるべきことは、それなりにやってきたつもりである。例えば本を読み、学んだ。ただ、それを書棚に返すことができなかっただけだ。そしてこれは、読書そのものとはまったく関係ないことである。

部屋の堆積と成長は僕の意志の外側で起きていたのである。森において樹木が成長するように、鼻孔において鼻糞が成長するように、知らないうちに部屋は成長して一定の形を持つに至った。これは僕の力の及ぶ外側のできごとであった。むしろ自然現象だったのであるかと思ふのである。

そしてさらにいえば、「自然」とはこのような、操作を断念された、不作為の領域のことをも、もともと含んでいたのではないかと思うのだ。

——いきなり話は飛ぶけれども、近年里山ボランティアというのが盛んだ。一九六〇年代の燃料革命によって経済価値を失ってしまった薪炭林が、放置によって荒れてきているという。それを市民の手によって、「生態学的に良好な状態に維持管理」しよう、というのである。

僕が不思議に思うのは、こうした活動の

中で「かつての里山は生態学的に理想的な管理をされていた」というような言葉が聞かれることだ。炭や薪にするために木を切っていたことが、森の環境を良くしていた、というのだ。

たぶんそのこと自体は、確かなのだろう。疑問に思うのは、そういう伐採が、「管理」するぞという意識のもとで行われてきたのかどうかということだ。現在里山ボランティアたちがその環境を守る上では、木を伐ることは、「管理」に他ならないが、かつての里人が山に柴刈りに行くというとき、それはあくまでも柴刈りであって、「管理」ではなかったのではないか。この二つは、客観的にはまったく同じ行為であることもあるのだろうが、その「刈る人」としては、まったく違う意味を持っているように思う。そして彼らに捉えられている「自然」もまったく違ったものなのだと思う。

もちろん、昔の里人だって、木を伐り倒し森を明るくすることが、どんなことをもたらすかは（今日の生態学者やボランティア以上に）知っていたはずだけれど、そこから森がどう蠢いていくかは、彼の作為の外だったのでないかと思うのだ。

伐られた森は、伐られたことを一つの契機としながら、それはそれとして独自の生き方を生きていく。そして人はその傍らをまた生きていく。その交渉は、「管理」とか「意志」とか「支配」といった世知辛いものでは、多分なかった。そこには肉親あるいは己の半身のような親しきがあり、疎遠になつたときには、そうした近しき故の容赦のなさがあつたのだろう（戦後の開発による風景の破壊の背景には、そんなDV的な残酷さがあるように思う）。

「支配」や「管理」の対象として直視しないこと。その自由な運動を横目で許すことで、里山は命に満ちたものとなる。それは、里山が「多様な『生物』を住まわせて

いるから」では多分ない。そのような、自由な運動を横目で許す態度そのものが、そこに生命を呼び寄せるのだ。何者かが「生命」をもつてそこに顕れる、ということ、それが生物であるということは、いつも同一視されるのだが、恐らく違う問題なのだ。

これはおかしな考え方だろうか。でも、「支配」と「管理」の視線を向けられた人は、そこでは既に生きた人間ではない（この視線は今や誰にも注がれているけれども）し、一方「神」というのは常に、さつき述べたような仕方で「生命」あるものとされてきたのではなかったか。神はいつだって、人間が直視したり支配したりできない者だった。もしかしたら、神とは僕たち自身の不作為の集合体なのかもしれない。

整理整頓は、その空間の隅々まで視線で射抜き、管理しようとする意志の現れだ。支配すること、すべてのものの管理が可能であると考えること、そういう視線で世界を眺め渡すことに、たぶん僕たちは慣れずたのだ。この視線はメデューサの視線で、眺め渡された世界は冷たく凍り付いてしまう。言葉は世界に触れることなく、管理下でのトートロジーが増殖し始める。今世に溢れている、既視感を伴う言葉たちは、こういうものなのだろう。

——そういう訳で、僕の部屋には神がいる。大切なものを不意に隠したり、思わぬ時に顕現させたりして、僕を畏れさせる。大掃除の直後の今は、刈られた山のように明るい、またいずれ暗く潤った森へと育ってしまうのだろう。

話が大きくなってしまった。片付けられない言い訳は、もうこの辺にしておこうと思うが、整理と計画に追いまくられるのも確かに窮屈なことだ。いいかげんであることは犯罪であるかのように言い募られる世の中だけれど、ちゃんとしすぎると見えなくなるものも、多分あると思うのである。

## 言葉の自由について

もう十五年も前になるか、清水鱗造さんに仲立ちしてもらって、福岡健二氏と初めて飲んだということがある。そのとき、当時鱗造さんの主宰する「Booby Trap」誌上に書きはじめていた芭蕉論について、氏に、倉田さんあれじゃあやっぱり判らないよと言われた。自分でも判っていたのかどうか、はなはだ心許ないところだったが、ある手触りのような感覚は強く持っていて、ただそれを言葉に出来ないもどかしさがあった。なんとなく、今ならそれを言えるような気がする。最初に思いついてから二十年近く、言葉にするまでにかかってしまったが、これについて、少し試みてみたい。話の始めは芭蕉書簡のうち、「蔦の評論」という名で伝えられる一文に関してである。

芭蕉の俳諧的閱歴では比較的初期の天和二年（1682）、芭蕉は美濃蕉門、大垣の谷木因に次のような付け合いを示して感想を請うている。

蔦ひびの籬まがきに蔦をながめて

蔦ひびのある花の賤屋しずやとよみにけり

連歌連俳の付け合いでは、花に花を付けるというようなことは原則として禁則に属する。花に、違うコトバである桜を付けることでさえ、憚られるのだ。これは同じカテゴリーに属するコトバを、一句を跨いでまた使うのをひどく嫌うことや、前句の面影を付け句で繰り返すことを出来るだけ避けようとする傾向と共通する、連句というものものの基本的性格でさえある。それをじゅうぶん知悉しているはずの練達の俳諧師が、蔦に蔦を持ってきて付け合いとするな

んてことをどうしてやったのか。

このアポリアを、木因は頭のいい生徒みたいに解いて見せて先生の前に提出している。こんな風に処理すればいいのではないでしようかと。

菜園集 卷七

春 俳諧哥

蔦のまがきに蔦をながめ侍りて

蔦ひびのある花の賤屋の朝もよひ

まきたつ山の煙見ゆらん

架空の勅撰集のような仕立てをつくつて、蔦は蔦でも詞書の蔦にすれば問題は無いのではないかと、と師に答えているのである。芭蕉は別の書簡でこの答えを激賞している。私はこれを、詞書といういわば「逃げ道」の発明を褒めたのではないと考える。付け合いというのは本来、一枚の画布に描かれた二つの文様の取り合わせの妙を謂うのではないと思うのだ。ある文様が描かれた一枚の画布に、別のもう一枚の文様入りの画布を突き合わせてみることなのではないか。その時「画布」は消えて見えないが、木因の示した解の詞書というのは、じつはこういった異なるディメンションの存在を示唆したもので、そういえばもともとの当の芭蕉考案の付け合いを見ると、「蔦のある花の賤屋と《よみにけり》と、やはりここでも前句とは違うディメンションが出現していることが知られる。

連句が面白いのは、このディメンション（画布）を異にする連衆というのが、さまざまに関係し合う取り合わせそれ自体にあるのであって、壮麗な一枚の（平面的な）

画の完成のためにひとりひとりが部分を担って協力し合うイメージというよりも、ABと対比され、BCとつづき、CBとAの対照が次々にあらわれる、といった、無時間的な経過という名の非構造的な音楽のイメージに近いものがある。睡眠や食事や明日のことがあるから、三十六句や百韻をもって限りというか区切りとするが、いつ止めてもいいし、どんなにつづいてもかまわないというのが本来なのではないか。

ことは言葉の自由ということに関わってくるけれど、いろんな画布があるということとは、あるものとあるものの対比が有意味的であれば（この取り合わせ自体に無意味なものを感じなければ）、それは鳶と鳶でもないし青空と灰皿でも何でもいいが、喻えるものと喻えられるものとは本来同等であることに繋がってゆくのではないか。それは不等式ではなく等式で結ばれる関係ではないか。「岩のような味のブドウ」と言ったとき、好悪や世間的な意味で当然不等式は成立するであろうが、岩とブドウはそう言う（そう言われた）とき、われわれのなかで共に生きられているという意味で、等式的に存在しているのである。詩の言葉や智慧の言葉はしばしばこのようにしてわれわれの前に露頭することがある。

と、いうことは、あるコトバはあるコトバに「対比されている」のであり、厳密に言えば、それはあることをあることで、主従的な関係裡に「喻えている」のではない、ということになる。詩にとってメタファーの占める地位はとんでもなく高い。映画「イル・ポステイノ」で、郵便夫がパブロ・ネルーダと会話するなかに、詩人が言った言葉「この星空も、風の響きも、海のうちねりも、みんなメタファーになるんだ」というのを引き取って、ではそれら夜の星や風や海や恋の囁きから成るこの世界というものそれ自体が、はたして何かのメタファー

なのか、と問いかける場面がある。郵便配達夫の問いはじつに本質的なところを衝いているのであって、実体本質論的なものから、このときネルーダは答えられずに、「とにかく泳ごう」と言うしかなかったのである。そうではなく、機縁があり、あるものが違う画布である別のあるものと合わさること、また異なる場面となって展開してゆく、というカレードスコープのような（量的な意味でない）無限の「対比」が存在しうることの異なる表現が、「世界はひとつのメタファーである」という言明なのだ。

これは何か「世界は幻のごときもの」と言っているのではない。あらゆるものはその（すべて）が対比されえ、あらゆる対比はどこかしらで意味を、言い換えればどこかしらでわれわれにとっての切実な実在性を有しているということだ。詩におけるメタファーの地位が高いと書いたが、詩に先立ってメタファーがあるのではないことは、肝に銘じておくべきだと思う。現在、詩の世界でメタファーは出尽くしたかと思わせられる。またそう思わせられるほど、この世界にある種の衰弱の兆候が見て取れるように思う。その中にはおそろしく巧緻を極めたメタファーを含むものもあるようだ。けれど、私はこのごろ黄葉した木、とか、冷たい風、とか、それどころか、恋しい、という一語にさえ、これはなんだか至上の喻ではないかと感じることがある。その言葉の前にただだけで、私という画布、そのディメンションの全体がひびきわたるのである。たぶんこのとき、それらの言葉は私の中の知られざる・見えざる何かと深い「対比」を起こしているのだ。

06/12/01 102

\*芭蕉書簡「鳶の評論」についての拙文は、清水鱗造氏のお手を煩わせ、愚HP「γページ」上に公開しています。

家で仕事をしていて、また、晩酌を伴う晩の食事は私がつくるので、散歩と買い物兼ね、一日一回は住んでいる町の中をぶらぶらとあるく。すると、総持寺の裏手にあるこの町に、散歩や買い物に出る独り暮らしと思いき老人が非常に多いことに気づく。近くに作業所があるみたいなので、それらしい若者や女たちも見ると、そこに通っていないそれらしい別の若者とも一日一遍は必ず出会う。可成りむすめらしく大きくなったダウン症の少女、電動車椅子を達者に操るおじさんや、カレー饅頭にコーラで遅い昼食をとる、ふつうならこんな時間にこんなところに居るはずのない色白で小太りの青年、自転車を猛烈な勢いで疾駆させ町内を定時巡回している、口舌のまったく不自由な筋骨逞しい男……。これらのうちにも私も加えられるだろう。一般的な市民が属する「職場社会」の此岸に展がっている光景は、またそれとは異なったマイノリティたちの白昼である。(倉田)

としのせ、第九のながいながい第3楽章を耳にするたび、  
どうぞ。

終わらないで。  
と、祈っている――。

病気が治癒してゆくとときの、祈りの甘みをベートーヴェンは、音と音でないものの境界線の形で見せてくれる。  
とてもなだらかだ。

絵のなかの「Canzona di ringraziamento」とは「感謝(の祈り)の歌」という意味のイタリア語にちなむもので、ベートーヴェンの弦楽カルテット十五番の楽章に書き込まれた言葉。(和田)

テレビをザッピングしていたら、ミミツクオクトバスという蛸が映った。斑というか、縞というか、黒い模様が入っているの、岩にでも付着してみせるのかと思ったら、八本の足を後方に流し、髪を束ねるようにまとめ、エイの形になった。それ以来私も、廊下を歩く時、心もちエイになる。  
(後藤)

家作りの勉強の奥が深く、困っている。深みにはまりそう。だんだん楽しくなってきたのかも知れない。小説を書くためのうちのつもりが、小説を書く代わりのおうちになってしまつてはまずい、と自分では思っているのだが。(木村)

初めて詩を書いてから、20年近い時間が経ちました。新聞を読んでいると、30代後半から40代前半の方々、私と同世代の方々の働きを多く目にします。私自身についても、2冊目の詩集の上梓、アモキサンの投与、インテルマックの購入など、今、人生の二度目の節目にさしかかっている気がするのです。詩を書いているおかげで、「これからただ老いていく」といった無力感に捕われずにいますし、愛猫も私を孤独から守ってくれています。(猫については、いずれまたどこかで書きたいと思います。)無理をせず、淡々と進んでいきたいと考える次第です。(野村)

『六ヶ所村ラブソディー』という映画を見た。昔、学校で見せられた原爆の映画は恐かったが、この映画は、あたりがやわらかい。しかし本当にこわいことが始まって

いるし、これから始まるうとしていると感じた。今年、核燃料再処理施設が稼動をはじめ。 (石川)

しゃぼん玉が好きになった。この頃は技術開発が進んでいて、市販されている専用のストローがなかなか良くできている。昔は飲み物用のストローの先を割いたりしたものだ。今はより良く液が絡むようになっていて、しかも玉離れ(?)が良い。吐気以外のフレッシュエアを巻き込むようなスリットが、側方に設けられていたりして、なかなか凝ったものである。大きい玉を作ろうと長く一定に吹こうとしたり、小さいのをたくさん出そうと早く細く吹いたり、あれこれ工夫しているうちに、だんだん頭が単純になってくる。ストローの先で虹色のだんだら模様が不思議な速さで回転しているのを、やや寄り眼がちになりながら見ていると、一層瞑想的になってくる。友達と連れ立って、大人数でやるのもまた楽しい。風景が色とりどりの泡が舞う中におどり出して、こちらも重力を失うようだ。視覚的なものも大きい。唇と息を使うというところが、心を簡単にしてくれるようだ。最近、口琴が似た効果を持っていることに気づいた。これを口に当ててびよんびよんと鳴らしていると、しびれに似た感覚に思考を奪われる。唇で何か不思議なものがついているという感覚が、僕を一気に赤子の状態に連れ戻してしまうようである。この二つがあれば、たいのいやらしいことは、やりすこしてしまえそうだ。皆さんも是非お試し下さい。(高野)